

赤色立体地図・空撮写真からみた城柵官衙遺跡

—宮城県石巻市桃生城跡・涌谷町日向館跡とその周辺—

相 原 淳 一 (東北歴史博物館)

谷 口 宏 充 (東北大名譽教授)・千 葉 達 朗 (アジア航測株)

1. はじめに

2. 経緯
3. 石巻市桃生城跡とその周辺

4. 涌谷町日向館跡とその周辺

- 5.まとめ
- 6.おわりに

1. はじめに

航空レーザー測量技術に基づく赤色立体地図は、アジア航測株式会社の千葉達朗が考案（千葉2006・千葉ほか2007）し、現在、同社が特許（第3670274号・第4272146号）を保有する新しい地形表現手法による立体地図である。この手法によると、樹木の伐採を行わずに、樹木に覆われる前の地形を可視化することが可能であり、すでに奈良県箸墓古墳・コナベ古墳、大阪府大山古墳（伝仁徳天皇陵）調査や長崎県原城跡調査ほかで実際に赤色立体地図の作成が行われ、その有効性が実証されている。2017年にはアジア航測株式会社が教育・研究者向けに赤色立体地図を公開し、国土地理院も2018年6月に公開した。

東北地方においても、遺跡の分布調査（南陽市教育委員会2017a）や古墳の測量調査（南陽市教育委員会2017b）において活用されはじめている。

2. 経緯

東北歴史博物館の考古分野では2008年度から2009年度にかけて（2011年3月に予定した調査は中止）、宮城県大崎市から東松島市、石巻市にかけて8世紀を中心にして設置された城柵官衙関連遺跡の外郭・防星線を確認するための分布調査を行って来た。

筆者は三陸自動車道（現三陸沿岸道路。以下、三陸道と表記）建設に伴う桃生城跡の発掘調査（宮城

県教育委員会2006）を行っている。2009年に行った東北歴史博物館考古分野による踏査では、涌谷町日向館跡において布目瓦が表面採集された。

なお、東日本大震災以降、東北歴史博物館からも考古分野学芸員2名（2014年からは1名）が復興発掘調査に従事することとなり、城柵官衙遺跡関連の分布調査は中止し、調査成果の取りまとめも延期してきた。

今回、報告するにあたり、補足の調査として2018年9月18日には涌谷町教育委員会生涯学習課文化財保護班および長年踏査に取り組んできた藤原二郎氏と日向館跡の踏査、11月26日には石巻市教育委員会複合文化施設開設準備室と桃生城跡東側部分の踏査を行っている。



図1 遺跡の位置

3. 石巻市桃生城跡とその周辺

A. 研究歴史と周辺の遺跡

『続日本紀』に記される桃生城に関する研究史は『矢本町史』(1973)や「桃生城擬定地をめぐる研究史」(宮城県多賀城跡調査研究所 1975)・『河北町誌』上巻(1975)・『桃生町史』第5巻通史編(1996)が詳しい。それらによると、熊谷真弓(1895)によって唱えられた桃生郡北端の標高159mの「茶臼山」説が最有力とされ、1950年代まではほぼ定説(池内1929・伊東1957)とされていた。ただし、茶臼山からは古瓦などの考古学的な確証を得ることができず、再検討の余地を残していた。

喜田貞吉(1923)は延喜式内社の「飯野山神社の向う側の字長者森から布目瓦が出土することから、「古い寺でもあったらしい。」と後の桃生城長者森説の原形となる説を提唱していた。

高橋富雄(1963)は「丘陵台地の突端、大谷地飯野新田の台上」から「奈良時代末期と推定されるところの各種の瓦」「土師器・須恵器をともない、大きな施設があったことが確認できる。」とし、「桃生町太田地区と河北町大谷地地区の接壤地带」を最も有力な桃生城擬定地とした。ただし、高橋が確認した調査地は明示されず、長者森と「飯野新田の台」を同一視してよいかどうかは定かではない。宮城県遺跡地名表には、飯野字新田に所在する「飯野館跡」(図4-4)の出土品に瓦・土師器が記載されており、高橋の言う「丘陵台地の突端、大谷地飯野新田の台

上」とはむしろこの「飯野館跡」を指しているようである。なお、高橋の記述中には土壙等の施設に係る部分はない。

紫桃正隆の調査(1973)では、「長者森城」の南側の広い台地の「二の丸か、南出丸」から「最近、数多くの古代瓦・須恵器などが出土した。」としている。紫桃の調査は記述と略図から図4×印付近のことと考えられる。

紫桃の調査に先立ち、小野寺正入(1969)は長者森には土壙等が存在すること、奈良時代末期と推定される布目瓦や土師器・須恵器が出土することから、桃生城跡として有力な推定地であることを述べている。桃生城の範囲は東は桃生町太田越路から飯野本地に至る線、西は桃生町袖沢から小池を通り河北町新田にいたる線、北は桃生町九郎沢から南は河北町飯野新田に至るとしており、宗全山(愛宕山)を頂点とする丘陵全域を桃生城とし、長者森の方形土郭を桃生城の中心施設と位置づけている。

小野寺の示した桃生城の範囲は、図4に示した地形的にもまとまりのある一帯地を指している。この太田¹²(旧桃生町)・飯野(旧河北町)地区には、延喜式内社の日高見神社・飯野山神社が所在し、日高見神社からは古瓦も出土することから、桃生城擬定地(加藤1961)のひとつとされたこともある。

宮城県多賀城跡調査研究所(以下、宮多研と表記)の1974年から2001年まで、間をおいて計10次に及ぶ発掘調査によって、現在の東西二郭構造の桃生城域が確定した(宮多研2002)。

2001年から始まった三陸道建設に伴う発掘調査では、角山遺跡(図4-16)の丘陵尾根に沿って横列跡(図2)が検出された。この横列は調査範囲を超えて延びており、桃生城の一一番外側の外郭線の一部と考えることもできよう。細谷B遺跡



(宮城県教育委員会2005)



図3 細谷B遺跡S102住居跡(南から)

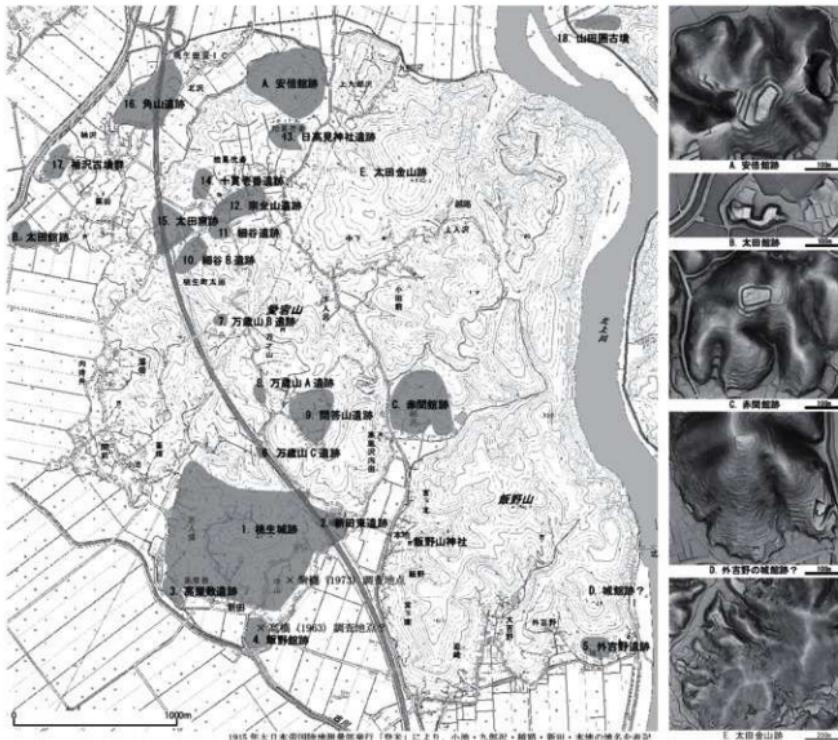
図2 角山遺跡横列跡(北から)

(図4-10) 第2号住居の暗渠には、桃生城の瓦が用いられており、桃生城との直接的な関連が窺われた。これらは小野寺が提唱した太田・飯野全域に及ぶ広域桃生城説を裏付ける証左のひとつと考えられる。その場合、ほぼ同時代の伊治城は段丘地形全域を外郭施設で囲み、北側に居住城、最も南側に内郭・政庁を配しており、同一の構造として捉えられよう。

桃生城の隣接地の調査(宮城県教育委員会2006)では、桃生城とされた範囲の東側から土塁(SX03)

や大溝(SD02・04・05)が確認され、桃生城の規模と構造・変遷については、今後の課題とした。

参考までに、「安永風土記」(1776)では、図4右Aのかつて桃生城に擬定されたこともある安倍館は安倍責任が、Bの太田館は八幡太郎義家が拠点にしたと伝えている。安倍館の東～南側の九郎沢・入沢・拾貫には「金を採掘した跡が無数」に残されており、年代不詳のE太田金山跡(桃生町史編纂委員会1988)と称されている。

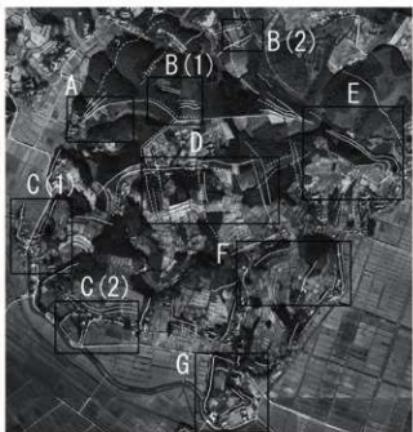


番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	出土品(古墳時代～)	番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	出土品(古墳時代～)
1	桃生城跡	66004	飯野字中山・太田字渡人領	上耕跡・筑毛跡・瓦・鉄製品	10	綿谷山道跡	70028	太田字綿谷	上耕跡・筑毛跡・瓦
2	新河原道跡	66073	飯野字新田	上耕跡・筑毛跡	11	綿谷道跡	70010	太田字綿谷	酒甕跡
3	高麗敷道跡	66072	飯野字高麗敷	上耕跡・筑毛跡	12	吉山道跡	70008	太田字吉山	上耕跡・筑毛跡・瓦
4	飯野船跡	66014	飯野字新田	上耕跡・瓦	13	日高見神社道跡	70003	太田字船賀	瓦・鐵器・瓦片
5	外吉野道跡	66061	飯野字外吉野	筑毛跡	14	日高見神道跡	70032	太田字松賀	上耕跡・筑毛跡
6	万歳山C道跡	70036	太田字万歳山	上耕跡・筑毛跡	15	太田東跡	70027	太田字松賀	上耕跡・筑毛跡・瓦
7	万歳山B道跡	70031	太田字万歳山	上耕跡・筑毛跡	16	吉山道跡	70029	太田字舟山	上耕跡・筑毛跡
8	万歳山A道跡	70030	太田字万歳山	上耕跡・筑毛跡	17	綿谷古墳群	70037	太田字船賀	星輪
9	御苦山道跡	66009	飯野字本地	上耕跡・筑毛跡	18	山田圓古墳	70001	御苦字柳ヶ迫	鐵手刀・鐵鋤・勾玉

図4 桃生城とその周辺遺跡(宮城県遺跡地図)(web版)宮城県教育庁文化財課HPから)



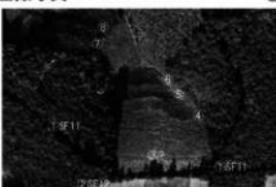
① 1961年国土地理院空撮写真



② 土壘状の高まりの分布



③ A地区



④ B(1)地区



⑤ B(2)地区



⑥ C(1)地区



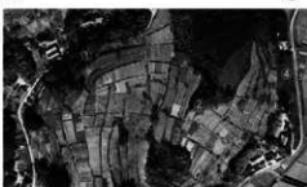
⑦ C(2)地区



⑧ D地区



⑨ E地区



⑩ F地区



⑪ G地区

※縮尺不同

図5 桃生城とその周辺(1961年国土地理院空中撮影)

B. 赤色立体地図・空撮写真からみた桃生城跡周辺

赤色立体地図（以下、赤色図と表記）および空中写真（以下、空撮と表記）を中心に比較検討する。

なお、赤色図（口絵3）では等高線方向の高まりも読み取られるが、段々畠の段を表しているものが多い。基本的に等高線に交差するラインを破線で落とした。空撮（図5）は1961年に国土地理院が行ったものを中心に入使用した。2013年国土地理院空撮や2019年Google衛星画像も随時、参照した。

(a) A地区（図5③）

外郭線北西隅地区である。宮多研第4次調査が行われ、3条の土星跡・築地塀跡が調査されている。赤色図・空撮では、さらに外側にもう1条の土星状の高まり（④？）が読み取られる。

(b) B(1)地区（図5④）

外郭線北部中央地区である。宮多研第1・2次調査が行われ、横「Y」字状をなすSF11・12土星跡が検出された。赤色図では、平行する形で横「Y」字状の土星状の高まりが読み取られ、空撮図でも③？がSF11に平行して、土星状の高まりと溝状の窪地が確認される。空撮図では④～⑧の土星状の高まりが確認されるが、赤色図では不明である。

(c) B(2)地区（図5⑤）

外郭線北東隅のさらに北側部分である。①～⑤の土星状の高まりが確認される。このうち、①と②の間は、溝状をなしている。赤色図では地形そのものがすでに失われており、確認することができない。

(d) C(1)地区（図5⑥）

外郭線の南西部である。赤色図・空撮とともに①～④の土星状の高まりが確認される。

(e) C(2)地区（図5⑦）

外郭線南西部である。宮多研第5次調査でSD54大溝跡とSA53材木堀跡が検出されている。空撮では林地の中に平行する2条の土星状の高まり・大溝状の窪地が確認され、畠の形状にも反映している。赤色図では土地変更が著しく、明確ではない。

(f) D地区（図5⑧）

政庁域・西側官衙地区の桃生城の中枢地区である。赤色図（口絵3⑤）・空撮とともに明瞭に東西南北辺の築地塀を読み取ることができる。赤色図・空撮では政庁域の外側に、宮多研第2次調査で確認された政庁東側のSF10版築遺構から連なる土星状の高まりが二重に囲んでいる。西側官衙地区も同様に土星状の高まりが二ないし三重の長方形状にめぐっている。

(g) E地区（図5⑨）

外郭線の東側である。三陸道建設に伴い、新田東遺跡・桃生城北東隅地区的発掘調査が行われている。桃生城北東隅地区的調査では、SX03土星跡・SD02溝跡等が検出され、従来の外郭施設の外側に遺構が存在することが確実となった。新田東遺跡の東側縁辺には2条の土星状の高まり（図6①②）が存在する。今回、石巻市教育委員会と土星状の高まりを実際に踏査によって確認している。

(h) F地区（図5⑩）

紫桃正隆（1973）の調査では、①の土星が略図に記されており、赤色図・空撮ともに確認される。

(i) G地区（図5⑪）

飯野館跡である。高橋富雄（1963）の調査地と推定される。赤色図・空撮では、一部二重をなす土星状の高まりがめぐっている。



① 2001年空撮　（宮城県教育委員会2003）



② 2018年踏査

図6 新田東遺跡東縁辺の土星状の高まり

4. 涌谷町日向館跡とその周辺

A. 研究歴史と周辺の遺跡

『続日本紀』に記される「小田郡」に関する考古学的な研究は、黄金山産金遺跡を主軸として行われてきた（佐々木1965・涌谷町編1994）。その研究史の淵源は江戸時代まで遡り、沖安海、大槻文彦、渡辺萬次郎、小野田匡高、扇畠忠雄、伊東信雄、内藤正恒、佐々木敏雄らが論考を重ねている。詳細な研究史は佐々木の論考に依ることとし、ここでは小田郡に関連する公的施設があったと推定されている「日向館跡」²³⁾（佐々木1965）を中心に、その周辺にみられる土壘状の高まり等について検討する。

『宮城県遺跡地図』（宮城県教育委員会1998）では、日向館跡は平安・近世の散布地・城館としており、出土品として近世陶器・寛永通宝が記載されているに過ぎない²⁴⁾。佐々木が「小田郡に関連する公的施設」と考えた主たる根拠は、神明社妙見宮²⁵⁾境内に鎮座する多賀神社との関係においてである。佐々木はこの多賀神社を小田軍團の守護神として勧請されたと理解した。

城山裏土壘跡も、宮城県遺跡地図（1998）では「中世？」とのみ記され、遺跡の範囲も、佐々木が「涌谷町史」で指摘する「コ」の字状をなしていない。佐々木の言う「コ」の字状とは「城山の現涌谷中学校の北方の裏から福沢公園の峯（桂巖院）を経



番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	出土品(古墳時代～)	番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	出土品(古墳時代～)
1	黄金山南遺跡	37100	涌谷字黄金山・子黄金山前	火・砂・土・石	11	城山土壘跡	371017	涌谷字城山	
2	黄金山南遺跡	37060	涌谷字黄金山	瓦・灰・輪郭・土・石・陶・鐵製品	12	追戸塚跡	371017	涌谷字城山	
3	金城跡	37200	成吉寺黄金山	瓦・井口	13	八方谷遺跡	371026	涌谷字八方谷	土器・瓦・鐵製品
4	七九郎館下みよし塚跡	37090	成吉寺黄金山中	瓦・井口	14	追戸・中野横穴墓群	371011	涌谷字小屋・中野・追戸・西・青・鐵製品・瓦・繩	
5	寺山遺跡	37040	下涌谷寺山	瓦・井口	15	追戸・中野横穴墓群	371011	涌谷字小屋・中野・追戸・西・青・鐵製品・瓦・繩	
6	入間田山遺跡	37060	下涌谷入間田山	瓦・井口	16	追戸・中野横穴墓群	371009	涌谷字中野	
7	日向館跡	37050	涌谷字日向町	瓦・井口・瓦・鐵製品	17	中野横穴墓	371006	涌谷字中野	
8	日向館跡	37050	涌谷字日向町	土・瓦・井口	18	龍道寺下横穴墓群	371014	涌谷字龍道寺	
9	神明社東・黄金山遺跡	37100-14	涌谷字黄金山	瓦・井口・瓦・鐵製品	19	御・輪・壇跡	371005	涌谷字御・輪	土器・瓦・鐵製品
10	船戸塚跡	37061	涌谷字白町船戸	土・瓦・鐵製品					

図7 日向館跡とその周辺遺跡（「宮城県遺跡地図」（web版）宮城県教育文化財課HPから）

て黄金迫の西方の山に至る丘陵台地、更に黄金迫の八方谷はっぽうやにみられる土壘を、城山・妙見山などの中心部を東西・北方で「コの字」状に防禦する古代施設」とし、「涌谷城は古代の遺構を受け継いだものではなかったか」と述べている。現地の標柱にも、「涌谷町史」と同様の主旨が記されている。

涌谷町教育委員会は2007年からこの「土壘状の高まり」の踏査とボーリング調査を行い、2009年からは宮城県多賀城跡調査研究所と合同で発掘による確認調査を行っている。同年、東北歴史博物館考古分野でも、日向館跡などの踏査を実施した。

B. 赤色図・空撮からみた日向館跡周辺

(a) A (1) 地区 (図8③)

涌谷中学校（字内林）と清淨院墓地（字上町）の地域付近を東西方向に二重の土壘状の高まり（①・②）が延びている。1961年空撮では、やや南側にはもう1条の土壘状の高まり（③）が延びていたが、現在は涌谷中学校のグラウンドになっており、残っていないようである。

(b) A (2) 地区 (図8④)

涌谷城本丸（涌谷神社：字下町）と江合川の間の部分である。「涌谷町史」（1965）編纂時の地形がほぼ1961年空撮には写っているが、1970年代後半の江合川及び道路改修によって大きく改変され、現在は河川敷となっている。佐々木（1965）の指摘する「コ」字状に囲む土壘の西側と思われる部分が、かつて涌谷神社（涌谷城本丸跡）方向に向かって、3連延びていた（①～③）。

涌谷城部分は、築城時の工事や公園整備あるいは江合川及び道路改修等によって失われ、現在、土壘状の高まりを赤色図においても読み取ることはできない。

(c) B地区 (図8⑤)

赤色図・空撮ともに涌谷字田下から上町の丘陵縁辺に沿って、2～3重の土壘状の高まりが延びている様子が読み取られる。ただし、北の上町側は民家が多く、土壘状の高まりはあまり明確ではない。北東側の田下地区では、丘陵縁辺に2条（①・②）、東側で南に向きを変える土壘状の高まりが1条（③）

延びており、土壘状の高まりに沿って、溝状の窪地が続いている。1961年の空撮では、畑地が大きく広がり、民家があったが、現在は林地となっている。

(d) C (1) 地区 (図8⑥)

『宮城県遺跡地図』（1998）に登録されていた最も典型的な城山裏土壘跡（37037）が所在する。涌谷字福沢・八幡山・内林ほかに所在する。2009・10年の涌谷町教育委員会の調査（福山宗志2010・涌谷町教委委員会2011・2016）では、6本の調査トレントトレンチが入れられ、SF1～7までの土壘跡の2～3条の土壘と、土壘間あるいは土壘に沿ってSD1～5の溝跡が検出されている。溝の中位からはいずれも、十和田aテフラ：To-a（915年）が検出されている。それぞれ2時期の変遷が確認され、瓦塔台部破片・須恵器片・土師器片等が出土し、8世紀～10世紀前葉以前の奈良・平安時代の遺構と考えられた。

(e) C (2) 地区 (図8⑦)

字福沢～神明社東～黄金迫地区である。城山裏土壘跡（37037）は「八十八カ所堂」から続く二重の土壘（①SF7・②SF6）は東南東方向にはほぼ直進し、①'・②'で北東方向に折れている。この土壘状の高まりは現存しており、赤色図でも読み取ることができる。①'・②'にはほぼ平行する形で、③・④の土壘状の高まりがある。⑤は黄金迫山を取り巻き、東西方向の⑥・⑦および南北方向の⑧・⑨の土壘状の高まりがある。ただし、⑧・⑨は民家が建て込んでおり、不詳である。

(f) D (1) 地区 (図8⑧)

日向館跡・黄金迫遺跡・日向館跡周辺である。日向館跡の内部施設は赤色図で読み取ることができ、頂部平場には大きな方形の壇があり、その壇を北北東方向の堀が切っている。1961年空撮では①・②に方形をなす区画施設の名残がみられ、③～⑤の土壘状の高まりや段に続いている。館の裾部には⑥～⑩の土壘状の高まりがある。⑪～⑫は南北方向に延びているが、民家が建て込んでおり、不詳である。

丘陵の最も低い裾部の⑦では2014～15年に発掘調査で奈良・平安時代の4棟の掘立柱建物跡、区画施設（SA6～8材木塀跡・掘立柱列）、溝跡等が検出され、瓦・土壁・土師器・須恵器が出土した（涌

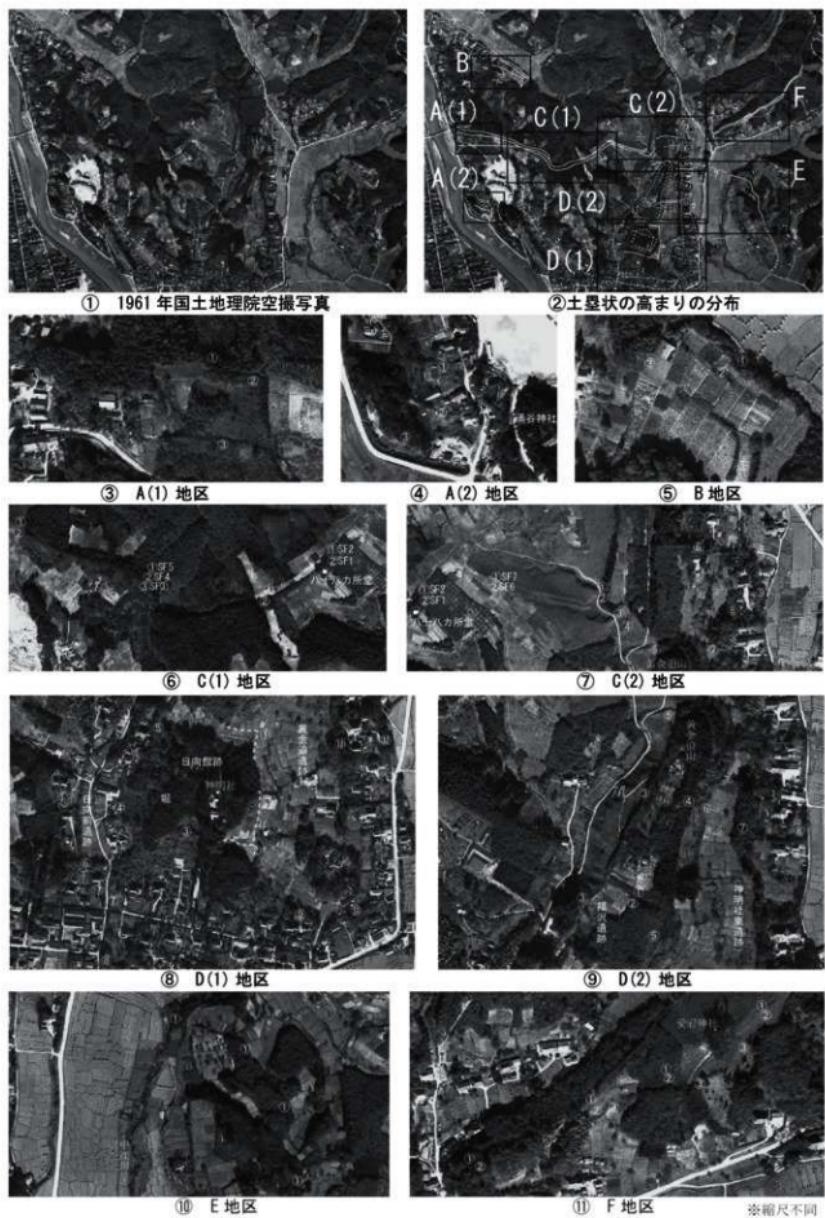


図8 日向熊館跡とその周辺(1961年国土地理院空中撮影)

谷町教育委員会2016)。なお、調査地区は字日向町である。日向館跡は字福沢に登録されており、齋體がある。赤色図(口絵4⑥)では日向館の南側丘陵裾部は微高地となっており、さらに南側は低湿地(字見龍寺浦・浦町前西)が広がっている。

日向館跡東側の神明社東遺跡は現在、黄金追遺跡に統合されている。佐々木(1965)によると、行基葺丸瓦が出土したのは「黄金追八番地」と記載しており、現在の統合された黄金追遺跡でも南東側で、丘陵の最も低い裾部に遺跡は広がっている。

(g) D (2) 地区(図8⑨)

日向館跡から北側の福沢遺跡～黄金追山周辺である。かつて佐々木(1965)が指摘した「コ」字状の東辺をなす部分である。1976年の宮城県遺跡地図(図9)や文化庁文化財保護部(1978)『全国遺跡地図宮城県』では、黄金追山を日向館跡としていた。赤色図・空撮とともに、土壙や段、堀切り等の施設が多数読み取られ、むしろ日向館の一部を構成する郭が続くものと考えられよう。これらの遺構が中世以降に限定されるのか、古代まで廻るものか含まれているのかは不明である。福沢遺跡や統合された旧神明社東遺跡からは土器や須恵器が採集されており、古代まで廻る遺跡は確実に北側まで広がっている。

(h) E 地区(図8⑩)

土器・須恵器の散布地として知られる八方谷遺跡を中心とした地区である。2008年に涌谷町教育委員会と宮多研のボーリング調査によって溝状の窪



図9 宮城県遺跡地図・地名表(1976年)
(宮城県教育委員会1976年)

み部分には十和田aテフラが堆積していることを確認し、古代の土壙状の高まりが中江川が南流する沖積平野を越えて続いている可能性があることを明らかにしている。赤色図(口絵4⑦)では頂部からさらに南に土壙状の高まりは連続している。

(i) F 地区(図8⑪)

涌谷字大崩に位置する。笠岳山塊から西南西に延びる低い丘陵の尾根筋からやや南側に、二重の土壙状の高まりが確認された。一部はやや南側にもう1条の土壙状の高まりがあり、三連となっている。ボーリング調査は行っていない。

現在、二重の土壙の溝状の窪み部分をやや平坦に整え、愛宕神社が鎮座している(図10)。この神社は天正19年(1591)、亘理氏移封の折に、亘理から



祭神は柄具突知命(火の神)。拝殿・本殿が溝状の窪地に直立する。
かつてこの地には塔場があったという伝承がある。



社殿の東側の二重の土壙状の高まりの様子。少し離れた南側にはもう一条の土壙状の高まりが走っている。

図10 愛宕神社

将来した三社のうちの一社であり、土壘状の高まりは少なくともそれ以前の構築と考えられよう。

C. 日向館跡でこれまで収集された遺物

日向館跡からこれまで収集された遺物は、現在、涌谷町教育委員会が收藏・保管している。遺物は教育委員会が調査したものほかに、佐々木茂楨・藤原二郎・安達調仁・大谷基の各氏が、踏査の折に採集し、寄贈したものが含まれている。今回の合同踏査で採集されたものも含め、その概要を記す。

(a) 遺物の散布状況

遺物は神明社境内をはじめ、参道石段、西側木立等から収集されている。かつては北側にあった段々畑からも土師器や須恵器が出土しており、神明社の鎮座する丘陵全体から、丘陵地形から沖積地に移行する微高地にも遺構や遺物があることがこれまでの調査で明らかとなっている。

(b) 収集資料の概要(図11)

収集資料は近世以降のものを除き、約100点ある。布目瓦、須恵器、土師器、赤焼き土器、中世陶器、鉄滓、ふいごの羽口、不明土製品・鉄製品等である。
 ①布目瓦 丸瓦・平瓦があり、平行叩きによるものと繩叩きによるものがある。瓦頭は未発見である。平行叩きによるものは焼成堅微で青灰色～灰白色を呈するものが多い。繩叩きによるものは、被熱による赤変瓦がやや目立っており、瓦葺建物の焼失の可能性が窺われる。

②須恵器 9世紀の底部が回転糸切りの坏(23)には、被熱による赤変が顕著に認められる。鉢(19)には「口當?」の墨書きがある。

③土師器 7世紀末～8世紀中頃の在地化した関東系土師器坏(24)がある。

④赤焼き土器 底径4～6cmのごく小さな坏・小皿類がある。

⑤中世陶器 常滑系の甕がある。

(c) 予察的検討

以上、日向館跡の収集資料からも、佐々木(1965)が指摘するように「小田郡に関わる公的施設」の存在が想定される。黄金山産金遺跡から出土する瓦は、「すべて繩叩き」(伊東1960)とされており、それよりは古い多賀城創建期の様相を呈する瓦がある。伊東はかつて『宮城県史』(1957)において、多賀城創建頃に、天平五柵が石巻平野から大崎平野にかけて造営され、牡鹿柵・新田柵・玉造柵・色麻柵の四柵と不明の一柵があり、その不明の一柵に小田郡中山柵⁵⁾を充てた。中山柵の記録自体は「日本後紀」延暦23年(804)が初出ではあるが、「当時の情勢」からその創建は天平期まで遡る可能性を指摘している。日向館跡の収集資料からも、他の四柵推定地と同様の傾向性が認められ、その存続期間の長さからも、小田郡家、天平五柵の不詳の一柵(あるいは中山柵)、小田軍団に関わる城柵などの役割を担いながら、中世城館へと変容していったものと考えられる。そうした意味では、大崎市名生館官衙遺跡(官多研1981他)が最も類似した遺跡と言えよう。

番号	遺物	特徴	番号	遺物	特徴
1	丸瓦	凸面/平行叩き/布目/灰白色(2.5V30/1), 凹面/布目/淡黄色(2.5V3/3)	16	平瓦	凸面/繩叩き/灰白色(2.5V30/2), 凹面/淡黄色(2.5V7/3)
2	丸瓦	凸面/AS/平行叩き/明青灰色(5BG7/1), 凹面/布目/青灰色(5BG6/1)	17	平瓦	凸面/繩叩き/青灰色(5BG1/1), 凹面/布目/青灰色(5BG5/1)
3	丸瓦	凸面/AS/平行叩き/明青灰色(5BG7/1), 凹面/布目/青灰色(5BG6/1)	18	須恵器	底/底壓紋, 西面/青灰色(5BG4/1), 内面/青灰色(5BG5/1)
4	丸瓦	赤変, 凸面/火照出し/淡黄色(5BG7/1), 凹面/布目/青灰色(5BG5/2)	19	須恵器	底, 外面/墨書き?/内面/黄褐色(10V87/2), 内面/灰白色(10V87/1)
5	丸瓦	赤変, 凸面/繩叩き/火照出し/灰褐色(5VB6/3), 凹面/布目/淡褐色(10V86/4), 亂瓦	20	須恵器	赤変, 外面/火照出し/淡褐色(5VB6/3), 内面/灰白色(5VB6/2)
6	丸瓦	赤変, 凸面/繩叩き/火照出し/淡黄色(10V86/2), 凹面/布目/火照-黄褐色(10V86/1)	21	須恵器	外付け棒(直径9.2cm), 底面/凹面/火照?→コロナザ, 黄褐色(10BG2/1), 内面/青灰色(10BG1/1)
7	丸瓦	赤変, 凸面/火照出し/AS/火照, 外面/火照?/内面/火照(7.5VB5/3), 凹面/布目/褐灰色(7.5VB6/1)	22	須恵器	外付け棒(直径8.4cm), 底面/凹面/火照?→コロナザ, 灰褐色(2.5V7/2), 内面/褐灰色(2.5V8/2)
8	丸瓦	凸面/ケズワナゲ/暗青灰色(5BG4/1), 凹面/布目/暗青灰色(5BG3/1)	23	須恵器	赤変, 直底(直径4.4cm), 底面/回転糸切り, 棕褐色(5V87/4), 内面/繩維付着, 内面/暗褐色(2.5V87/4)
9	赤平瓦	凸面/ではない?なし?ノギ, 灰白色(10V87/1), 凹面/ナダ/灰白色(2.5V8/1), 乱骨筋	24	土師器	直底系(1.6cm), 外面/火加水, 棕褐色(5V86/6)
10	平瓦	凸面/繩叩き/平行叩き/明青灰色(5BG7/1), 凹面/布目/灰白色(5BG6/1)	25	土師器	凸口/火加水, 外面/淡黄色(10V87/2), 内面/火照?→火照?/5V87/2)
11	平瓦	凸面/繩叩き/平行叩き/火照?/灰白色(5BG7/1), 凹面/布目/暗青色	26	赤滑器	直底(直径6.5cm), 外面/火照糸切り, 淡褐色(5V86/4), 内面/淡褐色(5V86/3)
12	平瓦	赤変, 亂瓦, 凸面/火照?/内面/火照褐色(10V87/1), 凹面/火照?/5V87/4)	27	串焼き土器	底(直径4.1cm), 底面/回転糸切り, 棕褐色(5V86/9), 内面/棕褐色(5V86/8)
13	平瓦	凸面/繩叩き/火照?/灰白色(2.5V8/1), 凹面/布目/暗青色(5BG3/2)	28	赤焼き土器	底(直径6.0cm), 底面/回転糸切り, 内面/火照?/5V87/4), 内面/火照?/5V87/2)
14	平瓦	凸面/繩叩き/火照?/暗青色(2.5V8/1), 凹面/布目/青灰色(5BG3/1)	29	中世陶器	常滑系, 外面/暗青色(5BG4/1), 内面/アラ版, 淡褐色(5S88/1)
15	平瓦	凸面/繩叩き/火照?/暗青色(5BG3/1), 凹面/布目/暗青色(5BG3/1)			

表1 日向館跡の主な採集資料観察表

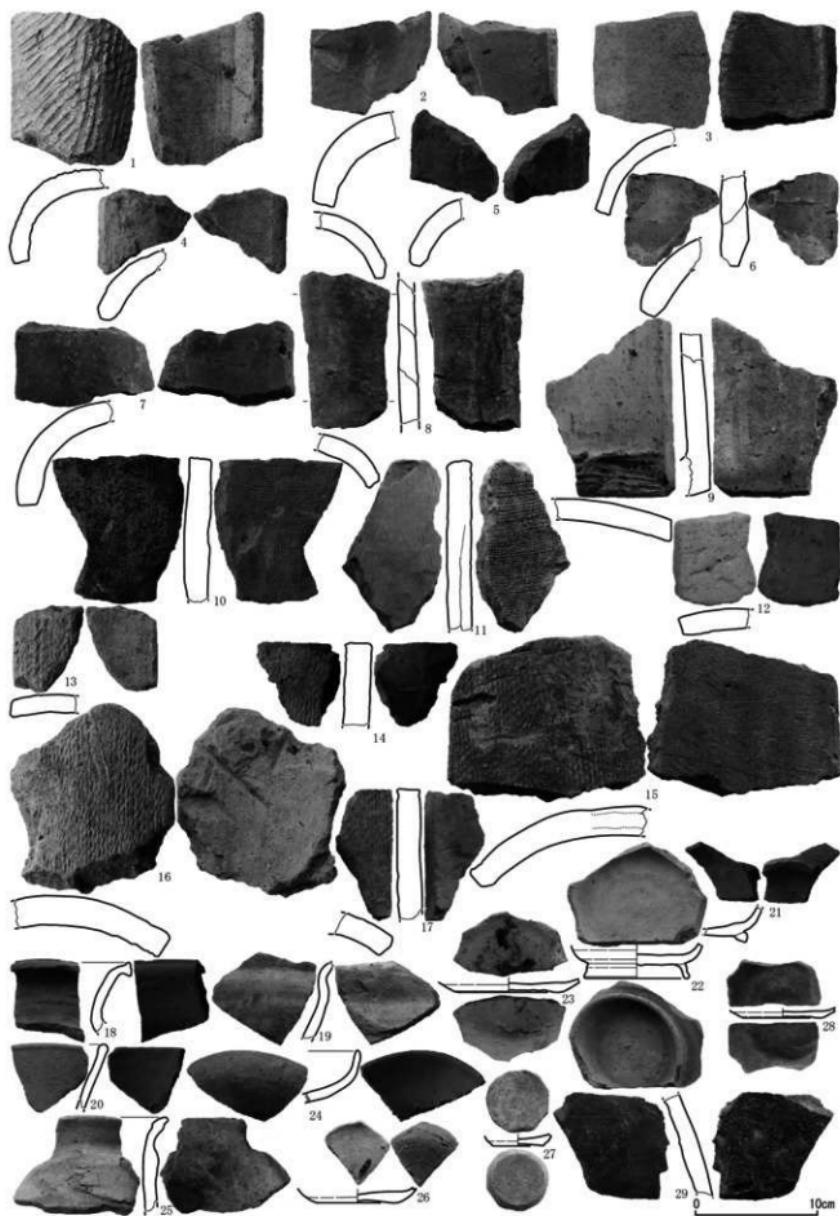


図11 日向館跡の主な採集資料

なお、日向館跡から北西の加護坊山(加護山國家安樂寺跡)の南側に広がる涌谷町上郡・下郡地区(図12)には、古代の集落跡とともに、大崎市側にかけて横穴墓群が分布しており、布目瓦は未発見ながらも、充分に郡家の存在を窺わせるものがある。その場合、遠田郡家、あるいは小田郡家の移転も含めて日向館跡との関係が問題となるが、上郡・下郡地区の発掘調査が行われておらず、不詳である。

また、加護坊山から東には、坂上田村麻呂が大同2年(807)に創建と伝える篠岳山巣峯寺へと概ね尾根伝いに参詣路が続き、加護坊山から西に尾根道をたどると、同じく坂上田村麻呂が大同2年(807)に勧請と伝える高天良神社(主祭神:塩土老翁神)を経て、新田柵推定地(興野1961)近くへと出る。新田柵跡推定地周辺には土壘状の高まりが広域に残

されており、すでに発掘調査(宮城県教育委員会1991・1992、大崎市教育委員会2007ほか)も行われている。篠岳丘陵の尾根筋を東西に結ぶ経路は眺望にも優れており、軍事上も重要な要衝と位置付けられていた可能性があろう。

5.まとめ

航空レーザー測量技術に基づく赤色立体地図は、樹木で覆われてみることができなかつ表層地形を可視化する新技術であり、今後の活用が大いに期待される。土壘などの可能性が考えられる遺構については、さらに踏査やボーリング調査、あるいは試掘調査等によって補完が必要なことも付記しておく。



番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	出土品(古墳時代~)	番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	出土品(古墳時代~)
1	加護山國家安樂寺跡	380-40	大曾子又兵十壇	(礎石)	13	山合田遺跡	37063	上郡子山合	土師器・須恵器
2	木曾不動尊前遺跡	38096	大沢字南ノ入	(奈良・平安)	14	上郡八幡遺跡	37049	上郡子八幡	土師器・須恵器
3	北ノ波油坂遺跡	38097	大沢字北ノ波	(奈良・平安)	15	北大久保遺跡	37048	上郡子北大久保	土師器・須恵器
4	大沢横穴墓群	38025	大沢字岩穴前	土師器・須恵器・人骨	16	大久保A遺跡	37063	上郡子西谷地	土師器・須恵器
5	猪止山遺跡	38075	大沢字猪止北	土師器・須恵器	17	大久保B遺跡	37054	上郡子西谷地	土師器
6	猪止山B遺跡	38077	大沢字猪止北	土師器・須恵器	18	大泽遺跡	37052	上郡子一賀	須恵器
7	柳川A遺跡	38074	大沢字柳ノ沢北	土師器・須恵器	19	一賀横穴墓群	37021	上郡子一賀	須恵器
8	柳川B遺跡(葉栗)	38076	大沢字柳ノ沢北	土師器・須恵器	20	西谷地遺跡	37051	上郡子西谷地	土師器・須恵器
9	原町遺跡	38073	大沢字原町	土師器	21	和野沼A遺跡	37055	上郡子水根	土師器
10	原町日遺跡	38086	大沢字原町	須恵器	22	和野沼B遺跡	37056	上郡子水根	土師器
11	大沢沿前横穴墓群	38027	大沢字前宿	須恵器・鉄刀	23	寺山遺跡	37042	下郡子釜場	鉄津・輪羽口
12	山合A遺跡	37050	上郡子山合	土師器・須恵器	24	入間田山遺跡	37065	下郡子入間田山	須恵器

図12 湧谷町上郡・下郡周辺の遺跡

※参考番号：37000番台は涌谷町、38000番台は大崎市田川

6. おわりに

本稿を草するにあたり、黄金山神社・飯野山神社・石巻市教育委員会・涌谷町教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所からは特段の御配慮を賜った。また、国土交通省国土地理院からは地形図・1961年空中撮影写真、アジア航測株式会社からは赤色立体地図を提供していただいた。佐々木茂楨氏・藤原二郎氏・車田敦氏からは、日向館跡はじめ加護坊山・算岳山に関して再三の御教授を賜った。記して、謝意を表するものである。

なお、本研究の一部は平成24～27年の科学研究費補助金基盤研究(B)24300262「東日本大震災からの復興を支援する科学コミュニケータ養成プログラムの開発と実践」(研究代表者: 谷口宏充)による。図2・3及び図4右A～Eは、国土地理院による震災直後の航空レーザー測量による高精度標高データを使用した赤色立体地図(Chiba, T. and Hasi, B. 2016) + 標高段彩図を原図とする。

【註】

- 1) 「桃生郡」の初出は『続日本紀』宝龟2年(771)の「陸奥國桃生郡人外從七位下牡鹿連猪手鷹姓道烏宿祢」である。桃生郡内では、唯一太田村だけが、嘉永3年(1850)の書上に「上郡山」の屋敷名を記している(桃生町史編纂委員会1988)が、この地名は現存せず、桃生郡家の所在地は不明である。
- 2) 頂部平場の南西側に壇状構造、西側に空堀跡などが残されている。黄金奉行として入来した大膳日向守の居館とも伝える。別称「日向守館」。
- 3) 旧妙見社地であるが、「この北斜面一带のだんだん畠と、田圃を掘て向銀、即ち北の丘の南東斜面一帯に、土器類・須恵器が散布してある。土器の様式上奈良時代のものであって聚落址と考へられる。」(佐々木敏雄1958)とされる。
- 4) 明治初年に神明社に改められた。もとは妙見宮と称した。天文19年(1591)に亘理氏移封の時に氏氏の妙見宮を将来した。右宮の塩竈社、左宮の多賀社が地主神の名残りをとどめている。
- 5) 伊東は中山柵擬定地に遠田郡涌谷町荒岳山、登米郡米山村中津山、桃生郡河南町佳景山の3説を上げ、中津山説を有力とした。

【引用参考文献】

相原 淳一 2003「桃生郡河北町桃生城跡2003」「平成15年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨」37～

- 42頁、宮城県考古学会
 相原 淳一 2004a「桃生城跡－平成15年度の調査の概要－」「第30回古代城柵官衙遺跡検討会資料集」39～45頁、古代城柵官衙遺跡検討会
 相原 淳一 2004b「すすむ三陸道建設 発掘調査から見える桃生の歴史」平成15年度桃生町文化講演会、桃生町公民館
 相原 淳一 2014「考古学からみたふるさと桃生の歴史～三陸道関連調査をふりかえって～」平成26年度桃生町さわらびの会総会・勉強会記念講演、石巻市桃生公民館
 吾妻 俊典 2004「桃生城」「銀行俱楽部」第470号、6-8頁、社団法人銀行協会銀行俱楽部
 伊東 信雄 1957「古代史」「宮城県史」第1巻
 伊東 信雄 1960「天平産金遺跡」涌谷町・黄金山神社
 池 内 優八 1929「東北に於ける上古の城柵遺蹟」「東北文化研究」第2巻第1号、27～42頁
 今泉 隆雄 2015「古代国家の東北辺境支配」吉川弘文館
 大崎市教育委員会 2007「国指定史跡名生館官衙遺跡26～27次・28次発掘調査報告書－新田柵跡推定地10～第8次発掘調査報告書－」宮城県大崎市文化財調査報告書第1集
 小野寺正人 1969「桃生城」「石巻日々新聞」1月7日・8日号、石巻日々新聞社
 加藤 孝 1961「考古学上からみた桃生村内の古代遺跡」「桃生村史」附録、1～18頁、桃生村史編纂委員会
 河北町誌編纂委員会 1975「河北町誌 上巻」河北町
 喜田 貞吉 1923「庄内と日高見(下)～日高見地方見聞録」「社会史研究」第9巻第2号、189-208頁
 奥野 義一 1957「奈良平安朝における遠田郡」「仙台郷土研究」第17巻第1号、45-51頁
 奥野 義一 1961「宮城県遠田郡田尻町出土古瓦の問題点」「歴史考古」6、5-15頁、歴史考古学研究会
 猪谷 真弓 1895「陸奥桃生城之考」「奥羽史学会会報」1古代城柵官衙検討会 2001「第27回古代城柵官衙検討会－特集：桃生城と伊治城」
 佐々木茂楨 1965「古代史」「涌谷町史」上巻、涌谷町
 佐々木茂楨 2004「黄金山産金遺跡」「宮城考古学」第6号、289-319頁、宮城県考古学会
 佐々木敏雄 1958「天平産金地に関する一考察」「仙台郷土研究」第18巻第1号、17-30頁
 紫桃 正隆 1973「史料 仙台領内古城・館 第二巻」宝文堂出版
 進藤 秋輝 2005「律令制支配と北上」「北上町史」通史編、75-116頁、北上町史編さん委員会
 高橋 富雄 1963「假夷」日本歴史叢書2 吉川弘文館
 田尻町教育委員会 2006「新田柵跡推定地9」田尻町文化財調査報告書第11集
 田尻町史編さん委員会 1982「田尻町史 上巻」田尻町
 田中 則和 2018「南三陸の山城と石塔」河北選書、河北新報出版センター
 千葉 達朗 2006「赤色立体地図－新しい地形表現手法－」「地図」第44巻Supplement号、14-15頁
 千葉達朗・鈴木雄介・平松孝吾 2007「地形表現手法の諸問題と赤色立体地図」「地図」第45巻、27-36頁

- Chiba, T. and Hasi, B. 2016 Ground surface visualization using Real Relief Image Map for a variety of map scale, *The Spatial Information Sciences*, XLI-B2, 12-19
- 千葉宗久ほか 1999「地図で見る桃生町の歴史」くつわの会
登米郡役所 1923「登米郡史 上巻」
- 南陽市教育委員会 2017a【南陽市道路分布調査報告書(5)】
南陽市埋蔵文化財調査報告書第15集
- 南陽市教育委員会 2017b【南森測量調査報告書】南陽市埋蔵文化財調査報告書第16集
- 東松島市教育委員会 2018「赤井遺跡－発掘調査経緯報告書
1－倉庫地区編－」古代牡鹿橋・牡鹿郡家・豪族居宅跡推定地－】東松島市文化財調査報告書第18集
- 福山 宗志 2010「城山裏土塁跡」「第36回古代城柵官衙遺跡検討会資料」古代城柵官衙遺跡検討会
- 南三陸海岸ジオパーク準備委員会2016「南三陸・仙台湾地域
のジオツアーガイド－東日本大震災による災害遺産を通じて自然の骨髓を理解し防災を学ぶ－」
- 宮城県教育委員会 1976a【宮城県遺跡地名表】宮城県文化財調査報告書第46集
- 宮城県教育委員会 1976b【宮城県遺跡地図】宮城県文化財調査報告書第47集
- 宮城県教育委員会 1991「八幡・大嶽八幡遺跡」「合戦原遺跡はか】宮城県文化財調査報告書第140集
- 宮城県教育委員会 1992「大嶽八幡遺跡」「金鷲神遺跡はか】
宮城県文化財調査報告書第150集
- 宮城県教育委員会 1998「宮城県遺跡地図」宮城県文化財調査報告書第176集
- 宮城県教育委員会 2003「新田東遺跡」宮城県文化財調査報告書第191集
- 宮城県教育委員会 2005「角山遺跡」宮城県文化財調査報告書第200集
- 宮城県教育委員会 2006「桃生城跡 細谷B遺跡」宮城県文化財調査報告書第205集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1975「桃生城跡I－昭和49年度発掘調査報告－」多賀城関連遺跡発掘調査研究所報告書第1冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1976「桃生城跡II－昭和50年度発掘調査報告－」多賀城関連遺跡発掘調査研究所報告書第2冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1981「名生館遺跡I－玉造柵跡推定地－」多賀城関連遺跡発掘調査研究所報告書第6冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1995「桃生城跡III」多賀城関連遺跡発掘調査研究所報告書第20冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1996「桃生城跡IV」多賀城関連遺跡発掘調査研究所報告書第21冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1997「桃生城跡V」多賀城関連遺跡発掘調査研究所報告書第22冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1998「桃生城跡VI」多賀城関連遺跡発掘調査研究所報告書第23冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1999「桃生城跡VII」多賀城関連遺跡発掘調査研究所報告書第24冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2000「桃生城跡VIII」多賀城関連遺跡発掘調査研究所報告書第25冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2001「桃生城跡IX」多賀城関連遺跡発掘調査研究所報告書第26冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2002「桃生城跡X」多賀城関連遺跡発掘調査研究所報告書第27冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2003「亀岡遺跡I」多賀城関連遺跡発掘調査研究所報告書第28冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2004「亀岡遺跡II」多賀城関連遺跡発掘調査研究所報告書第29冊
- 桃生郡教育会 1923「桃生郡誌」全 桃生郡役所
- 桃生村誌編纂委員会 1961「桃生村誌」宮城県桃生町役場
- 桃生町史編纂委員会 1988「桃生町史」第2巻 資料編
- 桃生町史編纂委員会 1996「桃生町史」第5巻 通史編
- 矢本町史編纂委員会 1973「矢本町史」第1巻 矢本町
- 矢本町教育委員会 2001「赤井遺跡I－牡鹿橋・郡家推定地－」矢本町文化財調査報告書第14集
- 米山町史編纂委員会 1974「米山町史」米山町
- 涌谷町教育委員会 1996「黄金山産金遺跡・黄金山遺跡」
涌谷町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 涌谷町教育委員会 2011「城山裏土塁跡」「第37回古代城柵官衙遺跡検討会資料」
- 涌谷町教育委員会 2015「日向館跡」「第41回古代城柵官衙遺跡検討会資料」
- 涌谷町教育委員会 2016「日向館跡・城山裏土塁跡」「第37回古代城柵官衙遺跡検討会資料」
- 涌谷町編 1994「黄金山産金遺跡－関係資料集－」